

しろあとだより

第4号

2012年3月

高槻市立
しろあと歴史館

高槻における俳諧について

井坂 武男

はじめに

俳諧とは、短詩形文芸の一つである。もともとは、「たわむれ」「滑稽」などという意味で、和歌・連歌のうち正当ではないものを指すものであった。その後、発句・連句・俳文・俳諧紀行・雑俳などを総称するという言葉となった。

江戸時代初期に松永貞徳(一五七一〜一六五三)は俳諧の普及にあたった。和歌のように形式にとらわれずに手軽に作れるということもあって、町人や百姓など幅広い層に俳諧は親しまれるようになる。そのことは村や町にのこされている史料や俳諧書などからわかる。

高槻市域においても、梶原村(現梶原一〜六丁目)の庄屋であった長谷川家に、「月並発句合」と表題のあるものや句を神社へ奉納(奉灯・奉額)したことがわかるもの、出版された俳諧書など俳諧に関する史料(1)がのこる。ここでは、これらの史料群から江戸時代における高槻市域の俳諧の一端を考察したい。

一、「月並発句合」について

「月並発句合」とは、毎月、日を決めて点者(俳諧を職業とする人)の出題に対する発句(2)を募集し、定例日に選句し結果を公開披露する催しである。その結果は摺物や点者の



「月並発句合」の表紙

目次

「高槻における俳諧について」 井坂武男	1
「第三回郷土玩具シンポジウム『土人形のかたちと時代』 清水亜弥	5
「戦国期の高槻と入江氏」 中西裕樹	7
「高槻藩九代藩主永井直進の念持仏について」 西本幸嗣	11

手書によって投句者に返された。その始まりは宝暦期(一七五一〜六四)頃からとされている(3)。当初は、俳諧師などの師匠を中心とする、その弟子達の俳諧技術向上のために行われていたものであった。江戸時代後期になると一般投句者を対象に、投句料(入花)をとり、高得点者に景品を添えるという営利的な催しとなった。

長谷川家には「月並発句合」と表題がある史料が三点のこる。投句したものに、点者が秀句を記して返したものと考えられる。その内の一つを詳細にみていきたい(4)。

この史料は縦二四・九cm×横一七・一cm、丁数一五丁(表紙・裏表紙を含む)の縦帳で手書きされ、表紙には「月並発句合 九拾三吟」とある。中には半丁に、五句ずつ(後半部分は二句ずつ)の句が記され、全部で一〇七句が掲載されており、表紙の九三吟(5)とは句数が異なる。現在の研究では、一回の月並発句合で一〇〇〇〜五〇〇〇句もの句が投稿されたことが明らかにされている(6)。この史料だけでは全体像はわからないが、掲載された句の約一〇〜五〇倍の句が投稿されていたと考えられる。

この史料の一二丁目裏には、

酒川邊

甲申夏日 芭客主人

懸校 (印) (印)



表紙裏の発句の題部分

と干支と人名が記されている。「酒川邊芭客主人」とは、月並発句合の点者と考えられる。干支の「甲申」は、月並発句合が盛んになったのが江戸時代後期であることから、文政七年（一八二四）と推測できる。表紙裏には、「柳・臘月・雉子・田植・夏書・蓮」とある。本文中の句をみると

船人が楊枝となりし川柳
又今も曇りて晩の臘月

春日野に戯て啼雉子のこへ

などと、表紙裏に記されている言葉のうち一つ（傍線部）が必ず使われていることから、この月並発句合の題といえる。この史料の奥には、

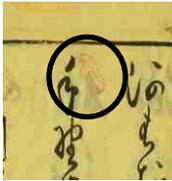
点式
式百貳拾五点 梅舎
百陸拾貳点 歎楽
百五拾七点 花遊

と点数と三人の名前がみられる。このうち一番の最高点である梅舎は、他の史料（7）に「東撰梶原長谷川梅舎」とある。このことから、この史料群が伝わっている長谷川家の人物であろう。「梅舎」とは、本名ではなく俳諧で名乗る名前（俳号）だと考えられる。「歎楽」と「花遊」は今のところどのような人物であるか不明である。

梅舎は他の二つの「月並発句合」にも、一番高い点数がつけられている。最高点をつけられ返ってきたものであるから、これらの史料を残したものであるであろう。

本文中の句の横には、朱や墨で丸や四角の形の印が捺されている（下の写真の円内）。この印には、形や色によって点数が決められていた（8）。その合計が計算され奥に上位三名の名前と点数が記されている。残念ながら前半部分の句に作者名がないため、点数の内訳まではわからない。

一二丁目表から、半丁ごとに二句ずつ記載され作者名もある。この句の横の印は、朱印で長細いものや、大きいものが捺されている。また、蝶や牛など



丸印の部分



四角印の部分

の昆虫や動物の形もある。作者名があることや印の違いから前半部分よりも最高点の句であると考えられる。

梅舎は、後半部分で四句選ばれており、多くの投句者の中で、二五点という最高点をとっている。優れた俳人であったことがうかがえる。

また、梅舎の一代で収集したものはわからないが、長谷川家ではここで紹介する史料以外にも多く俳諧に関するものがあり、意識的に収集したと考えられる。

二、奉灯・奉額の句合

長谷川家では、「奉灯句合」「奉額句合」など、神社などへ奉納目的の句合に関する史料もこのころ。俳諧を神社・仏閣などに奉納するという行為は貞門時代（9）からおこなわれていた。

初めは純粹な奉納目的であったが、江戸時代後期には月並発句合が盛んになり、月並発句合の催される名目の一つとなった（10）。決して信仰心がなくなくなったのではなく、神社に絵馬などが残っている事例（11）から人々の信仰心と結びついて盛んに行われた。

①奉灯句合

奉灯句合とは、募集され集まった句のうち秀句を行灯に記し、神社・仏閣に奉納するために催された句合である。長谷川家には「奉灯句合」に関する史料が六点伝わる。

このうちに「順評奉灯発句合」と表題がある史料（12）がある。内容は、半丁ごとに五句ずつ掲載されて一八句載せられている。表紙裏には「題三月之部」とあり、句には「雛」「桃」など三月に関するものが載せられている。作者名や奉納した神社・仏閣名の記載がなく詳細はわからない。行灯に実際に書き記される句を書き記したものだとは推測できる。

この史料で特徴なのは表紙に「梶原社中」とあることである。「社中」



作者名がある句と蝶や牛の形の印部分

には同門や同じ組織の仲間という意味があり、多くの句が載せられているため、梶原村内に俳諧を楽しむ俳人が多くいたのではないだろうか。この史料は、広域から句を募ったのではなく、梶原村内の俳人だけで、地元の神社などに奉納した記録ではないかと考えられる。

②奉額句合

奉額句合とは、「掲額」「懸額」とも呼ばれ、神社に俳諧の秀句を記した絵馬額を奉納するために募集された句合である。

奉額句合に関する史料は二点残る。一点目(13)の表紙には、

梶原天満宮奉額

四季

発句合

抜粹

とある。梶原天満宮へ奉額の目的で句合が行われたことがわかる。また「抜粹」とあることから、多く集まった句から選んだものを書き記したものである。

表紙に「梶原天満宮」とあるが、現在梶原には、天満宮は存在していない。村域にある神社は畑山神社だけである。畑山神社内に天満宮があったという記録もなく、どこの神社をさしているかは不明である。ただ「梶原」とあるため、村内の神社に奉納したものであろう。

二点目の史料(14)の表紙には、

東撰梶原

長谷川梅舎

巨椋社奉額発句合

御清書元様

入式百三穴添

史料の奥書には、

三拾吟

撰州道斎浜

千一引

梶原

梅舎拜

御清書元様

入式添

とある。「巨椋社」とは現在京都府宇治市にある「巨椋神社」のことと考

えられる。「御清書元」とは、発句合を開催する経営者のことである(15)。奥書から、道斎浜の千一引と梶原の梅舎が御清書元に差し出したものとなる。御清書元が巨椋神社への奉額のため句を広く募集し、それに対して千一引と梅舎が応募した史料であろう。中の句に異筆で点数がつけられていることと、長谷川家側にこの史料が残っていることから御清書元が点数をつけ返ってきたものと考えられる。

村内の神社だけではなく周辺の神社へも句を奉納していたことがわかる史料である。

三、出版物にみる俳諧

同家の史料群には、出版された俳諧書をみることが出来る。江戸時代、出版業が盛んになり数多くの俳諧書が出版されている。長谷川家に残る史料の中に、同家が住んでいた梶原村をはじめ、唐崎・庄所など周辺の村々出身者が掲載された俳諧書がある。

この史料(16)は「手向の御内」と表題があり、縦二二・八cm×横一五・七cm、丁数二六丁(表紙・裏表紙を含む)の版本である。版元はわからず奥書には、「文化七年秋 自耕亭舊圃」とある。文化七年(一八一〇)の秋に版行されたことがわかる。名前部分の「自耕亭舊圃」とは本文中に「輯者 舊圃」とあり、この俳諧書の編集を行った人物である。この俳諧書には、舊圃自身の三七句載せている。

中の俳諧の載せ方は、

三四坊梅後撰

照る月や海を出て見る須磨の秋

春風や鐘さへ句ふ東山

其儘の身社安けれ藪の梅

というふうな、初めに「三四坊梅後撰」と句を選んだ者の名前があり、



撰者・句・地名・作者名が見られる部分

その後句が続く。句の次に「梶原」「中城」などの出身の村や地名が記され、一番下に名前が記されている。

撰者は全員で「三四坊梅後」「伊函和嗅低」「長風亭扇暑」「東居斎菊英」「松竹居東明」「東林亭秀暁」の六名で撰者自身も句を載せている。

この俳諧書の特徴は、出身地名の記載があることである。それを表にまとめたのが左の表である。二三ある地名のうち一が高槻市域の地名であることがわかる。高槻市域以外の地名は「東大寺」などの島本町域、「奈良」「中城」など茨木市域、「枚方」などの枚方市域がみられ、いずれも高槻から近い地域である。

多くの地名の中で「高槻」は十六人と最も多くの人数が選ばれている。高槻は城下であるため百姓だけではなく、町人や武士など幅広い層が選ばれたと考えられる。

長谷川家が庄屋を勤める「梶原」も一人選ばれている。「亀石」という人物で五句掲載されている。長谷川家出身の人物かはわからないが、長谷川家と俳諧を通じて交友がある人物であろう。

句数は追加分もあわせて全部で四一六句掲載される。前書には、五〇〇〇句が集まったとあり、その内四一六句が選ばれて版本になった。どの範囲で集められた句かは分からない。「大坂」や「浪花」「佐太」の地名があるため、摂津・河内を中心に募集され撰句されたものと考えられる。その中で高槻市域は一一地域四二人、二三四句が選ばれており、全体の半数以上を占めている。高槻市域で俳諧が盛んに作られ、優れた俳人が多くいたことがうかがえる。

俳諧書にある地名	現在の市域	人数
阿武	※高槻市	1
天川	※高槻市	1
梶原	※高槻市	1
成合	※高槻市	1
西面	※高槻市	1
番田	※高槻市	1
河佐太	守口市	1
河二番	門真市	1
東大寺	島本町	1
奈良	茨木市	1
河伊函	不明	1
河銀川	不明	1
芥川	※高槻市	2
道斎	※高槻市	2
河神田	寝屋川市	2
中城	茨木市	2
大坂	大阪市	3
浪花	大阪市	3
枚方	枚方市	3
鳥飼	摂津市	5
庄所	※高槻市	6
唐崎	※高槻市	10
高槻	※高槻市	16
その他	—	2
合計		68

俳諧書にみられる地名

おわりに

断片的ではあるが、梶原村の庄屋であった長谷川家の史料から高槻市域の俳諧について考察をおこなった。「月並発句合」「奉灯・奉額の句合」などの関係史料からは、梶原から多くの者が句合に投句した様子がわかる。また、その句合で高得点をとった「梅舎」という優れた俳人がいた。出版物としての俳諧書にも、高槻市域の俳人が多く選ばれ句を載せている。江戸時代後期の高槻市域では、豊かな俳諧文化が形成されていたと考えられる。

【注】

- (1) 元々しろあと歴史館に、長谷川家の文書は寄託されており、今回追加で史料の寄贈を受けた。前回寄託分の同家の文書群「長谷川家文書」と区別するためと、古文書だけではなく、巻子・版本など様々な史料があるため「長谷川家資料」という文書群名とした。
- (2) 発句とは、連歌・連句の巻頭第一句をいい、五・七・五の形式をとる。季語や切字をそなえることを要件とする。明治期に正岡子規（八六七〜一九〇二）が発句を連句から切り離し、俳句として独立させた。
- (3) 櫻井武次郎著『俳諧史の分岐点』（和泉書院 二〇〇四年）。
- (4) 長谷川家資料二・九二。
- (5) 俳諧では句そのものを「吟」ということがある。
- (6) 中野沙恵「月並句合の実態」（『国文学漢文学論叢』第二十輯一九七五年）。
- (7) 長谷川家資料七・六〇。
- (8) 『俳文学大辞典』（角川書店 一九九五年）。
- (9) 松永貞徳とその弟子が活躍した寛永期から寛文期（一六二四〜一六七三）をさす。
- (10) 注3、注6。
- (11) 注8。
- (12) 長谷川家資料七・五九。
- (13) 長谷川家資料七・六四。
- (14) 長谷川家資料七・六〇。
- (15) 江戸時代後期頃、興行のために組織化され点者が主催者や経営者というわけではなくなる。御清書元・点者・取次など役割を分けて構成され行われていた。
- (16) 長谷川家資料二・五四。

第三回郷土玩具シンポジウム『土人形のかたちと時代』

清水 亜弥

平成二十四年一月四日から二月二十六日にかけて、当館では冬季企画展「開運！福を呼ぶ縁起物―初詣はしるあとへ―」を開催した。この展示は、当館が所蔵する郷土玩具コレクション（奥村コレクション・玉村コレクション）から、「商売繁盛」「家内安全」「無病息災」「子孫繁栄」というテーマ別に、ご利益を持つ「縁起物」とされる郷土玩具を選び、紹介したものである。商売繁盛の神である恵比寿・大黒、京都で火防の神としてかまどに祀られた布袋などの土人形や、「蘇民将来」のお守り、子どもの熱病をうつして快復させるまじないに用いられた張子の「ほうこさん」人形など、バラエティに富んだ展示となった。



主に寺社などから授与されるこれらの郷土玩具は、身近な材料で作られた素材なものである。しかし、人びとが願い、祈ってきた思いは、古く江戸時代から現代まで変わらないということを教えてくれる、貴重な民俗資料でもある。同展に併せて、当館における郷土玩具を学際的に考える取り組みの一環として、これまでも開催してきた「郷土玩具シンポジウム」の第三回目を実施した。

これまでのシンポジウムでは、当館のコレクションの核であり、「土人形の祖」とも呼ばれる京都の「伏見人形」をテーマとしてきた。しかし今回は伏見人形に限定することなく、地域による、あるいは時代による土人形のかたちを考えることを目的として「土人形のかたちと時代」と題した。そこで、大阪市内で

の近世遺跡の発掘調査に多く携わり、出土資料の土人形を数多く整理されてきた大阪市文化財研究所の川村紀子氏に「発掘された土人形―大坂と京都―」というテーマで報告をお願いした。

また、清水が「土人形の種類―奥村コレクションより―」と題して、伏見人形だけでなく、伏見人形を元に創始したとの伝承を持つ、八橋人形（秋田）や稲畑人形（兵庫）をはじめ、新潟・岐阜・愛知・福岡など全国の土人形について取り上げた。

本稿では、このシンポジウムの概要について報告する。

川村報告「発掘された土人形―大坂と京都―」

出土資料の土人形は大半が割れ、彩色も落ちていいる。そのため、製作方法や元の土の色や材質が分かりやすい。また、ほとんどが生活圏内のゴミ捨て場に廃棄されているものであることから、共存する茶碗などの資料と比較することで使用された時期や場所も特定することができる。これらは人から人へと伝えられた伝世品にはない特徴である。



川村氏は大阪で土人形を製作していた窯跡と思われる場所を特定されている。土人形の「型」とその型から作られた人形が同時に出土したことがその決め手となり、ままごと道具などの型も見つかったという。また、土ではなく瓦製の土人形や型が出土しており、その地域にあった瓦製造業との技術的な交流が判明した。これは、第二回シンポジウムで木立雅朗氏が、京都での窯の発掘調査から、伏見人形と京焼・瓦製造技術との関連を指摘されたこ

とともに共通し、興味深い内容となった。

また、氏は出土資料から大坂・京都での土人形の変遷を表にまとめて発表した。ともに一七世紀前半に人形が見られはじめるが出土例は少なく、やがて一八世紀初めから中ごろにかけて京都では人形の断面が中空となる大型の人形が出現する。大坂では一八世紀後半に爆発的に出土量が増加するが、中空の中・大型の人形が多く見られる京都に対して中実(中が空洞でない)で小型のものが多いという。

この人形の数と種類が増加する時期は、文献からも同じ傾向があることが指摘されている。さらに、一八世紀後半以降の人形を見ると、大坂のもの胎土が荒く、小型であるにもかかわらず、底部に大きな穴があいているものが多いのが特徴であるという。

大坂は京都から淀川を経由して物資が集積する場所であり、「伏見人形」は全国的に有名なブランドとして早くから確立されていた。そうしたなかで、大坂では伏見人形でなく地元で作られた小型の人形が流通していたことが注目される。



起人形(愛知県)の「武将」(虎加藤)

清水報告「土人形の種類―奥村

コレクションより―

「伏見人形は土人形の祖」とされるように、たとえば伏見人形を代表する「饅頭喰い」の童子はどの地域でもほぼ同じ、両手に饅頭を持つ、着物姿で表されている。一方で、五月の節供飾りとされた「武将」は人気に違いがあるように、伏見では五三の桐紋をつけた冠大将(太閤さん)があるが、他地域では虎とともに表される加藤清正が多く、九州では疱瘡神とされた笹野才蔵などがみられる。



伏見人形の「歌舞伎物」(成田屋人形)

また、伏見人形で「歌舞伎物」といえば七代目市川団十郎が自分の舞台姿を作らせたという「暫」「助六」「矢の根」の成田屋人形が有名だが、愛知県の乙川人形や棚尾人形、旭人形などでは、大型の組み物(二人一組の人形)で弁慶と義経、敦盛と直実などを躍動感ある姿で表す歌舞伎物がコレクション中の大半を占めている。これらについて、写真を多く用いて紹介した。

大蔵永常の『広益国産考』には伏見人形から型取りして土人形を製作する方法が載せられており、人形の地産地消が奨励されたことが分かるが、各地で始まった人形作りはやがて伏見の模倣だけでなく、その地域のニーズに応じた個性を持つようになっていったことが想像される。前述の愛知県の土人形産地では、その原型を瓦師に依頼して作成させたとの記録があり、周辺諸産業の技術的な交流が土人形作りの基盤にあったことは大坂・京都と共通するといえるかもしれない。こうした土人形作りが盛んな地域の共通点や、伏見人形の伝播と、地域ごとの土人形の特徴などについては、奥村コレクションのみではその傾向を網羅しきれないこともあるが、今後の課題としていきたい。

今回のシンポジウムでは、前回以上に多くの参加者が来場し、普段目にすることの少ない出土資料としての土人形の写真などに強い関心が寄せられた。今後も当館では郷土玩具に対して、新たな切り口による学術的なアプローチを試みていきたいと考えている。

戦国期の高槻と入江氏

中西 裕樹

一 はじめに

戦国期の高槻には、入江氏の城館が存在した。後の高槻城下町の前史にあたる。入江氏に関しては史料が乏しく、また当時の遺構が城郭建設等で破壊されているため、その様相の具体的な復元は困難である。しかし、高槻城下町は、この戦国期の集落に影響を受けたことが指摘されて久しい。

中部よし子は「寺院、市場町は高槻城の存在によって繁栄し来ったのであるが、領主権力の集中に伴い高槻城が拡大し来る時は、之等の市場集落が城内地域となる為、之を避けてであろう、高槻城は東北を欠け込ましている。以上考察した所から見れば、高槻は、近世大名が城郭建設と同時に都市計画を行った為、截然たる配置を有した城下町ではなく、当時は多分に自然発生的な景観を示していた」とした(1)。つまり、近世城下町の空間と成立については、戦国期の集落を前提にする必要がある。

また、以前の拙稿では、天正八年(一五八〇)ごろの織田政権では破城令と同時に近世に接続する城下町の場合が選定され、その一つの傾向が先行する寺内町などの町場と交通体系を共有する立地で、地域の武士などが結集する城館であったとした。その事例に、高槻城下町と近隣の富田寺内町との関係を想定している(2)。

高槻城については、発掘調査が実施されてきた。端緒となった一九七五年実施の本丸跡発掘調査では石垣の基礎部分を確認され、森田克行による石垣構築技術や瓦の時期区分などは以降に本格化する城館の発掘調査に大きな影響を与えた(3)。しかし、戦国く織豊期に関するデータは限られ、特に城下町については小林健太郎(4)の研究から大きな進展はみられない。基礎資料となる文禄・元和期の高槻村検地帳も未翻刻であり、由緒等に関する近世史料の把握と研究は、昭和二十八年(一九五三)刊の天坊幸彦『高槻通史』以降、進展していない。いずれにしても、高槻城下町については、近世以降にしか関心が集まらない状況にある。

そこで、非常に簡単な作業であるが、以下では周知の絵図や史料、断片的な地誌の記述などに拠りながら、戦国期の高槻と周辺の交通路との関係、

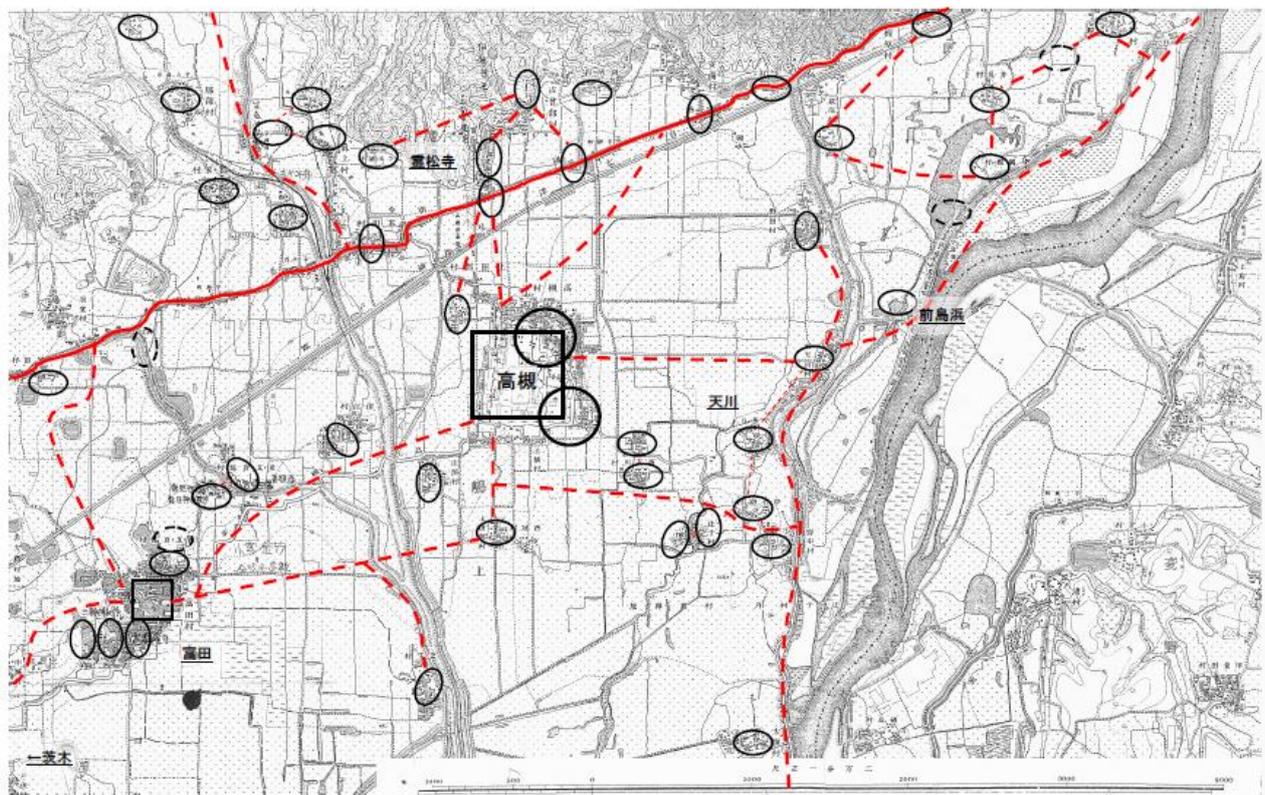


図1 戦国期高槻と周辺交通路

(明治仮製地形図を使用。中央○は想定集落、四角・小判型は慶長十年撰津国絵図の町・村の集落表記。破線は道筋)

城館の主体と考えられる入江氏の性格を整理し、少しでも近世城下町に先行する場を素描する作業を進めたい。

二 戦国期高槻と交通路

ここでは、「慶長十年撰津国絵図」（西宮市蔵）を取り上げる。この絵図は江戸幕府が慶長十年（一六〇五）、全国に作成・提出を命じた国絵図の一つで、担当奉行は片桐且元であった。集落や主要な街道などの位置が示され、特に集落については村を小判型、町を四角形に描き分けている。戦国期からほとんど製作された公的な絵図であり、そこに描かれた村や道の位置などは、概ね戦国期の状況を示すと考えても良いだろう。図1は、この国絵図に描かれた道筋と集落（町・村）の位置を明治仮製地形図に加筆したものである。

高槻は四角形で表記された町場であり、地形的には芥川が形成した標高八mラインの扇状地の突端にあたる。その西側の道筋を確認すると、この八mラインに沿うような形で、富田寺内町と以東の集落の合間をぬって高槻へと至る道が認められる。富田は、四角形の周囲に複数の小判型の村が接した形で描かれていた。高槻や富田は、戦国期に「上郡」と呼ばれた地域に含まれるが、この表現からも富田はその地域を代表する町場として栄えていた様子がうかがえる(5)。また、図外になるが、富田の西側には四角形の内部に「茨木城」と表記された茨木の集落が所在し、道筋はこの茨木をもつなぐ。茨木は、戦国期初頭に細川京兆家の守護所として機能し(6)、富田と同様に上郡を代表する町場であったと考えられる。

他には、高槻から見た場合、北西にあたる山間部の集落から西国街道の芥川宿へと至る道筋が存在した。この道筋は芥川宿で止まるようにみえるが、仮製地形図には宿の東端から高槻へと延びる道がある。近世に「高槻道」と呼ばれた芥川と高槻を結ぶ主要ルートだが、道筋は水路に沿って湾曲した形状である。このため、「高槻道」は、基本的に直線街区で構成される城下町にあわせて設定された道ではなく、戦国期以来の道筋を踏襲したものと考えることが可能であろう。また、十八世紀には「高槻道」沿いに「紺屋町」という町場が形成されるが、それ以前には存在しなかった(7)。したがって、北西山間部の集落から芥川へと到達した道は、戦国期において高槻まで延長していたとみられる。

一方、高槻の東側をみると、近世に城下町の「前島口」と呼ばれた地点に淀川の川港であった前島浜を結ぶ道が到達している。前島浜は、山間部からの物資を京都・大坂へ積み出す港であり、中世には付近に興福寺領であった「鶴殿関所」が所在していた(8)。

これら高槻周辺の道筋をふまえると、戦国期の高槻は、茨木・富田という地域を代表する町場と山間部から芥川宿を経由する道筋が集落の間をぬって合流し、淀川の川港をつなぐ結節点であったといえる。近世高槻城下町の「前島口」付近の町名が、「本町」であることも興味深い。本町という地名は、当初の町場を示すことが多く、高槻城下町が地域の町場や村々と淀川を結ぶ集落という性格から始まったことを示すように思える。

三 入江氏の性格

戦国期高槻に城館を構えた入江氏は一次史料に恵まれないが、表1で示した古記録での表現を見ると、「入江」に加え、「高槻」という呼称が付された場合が多い。また「高槻南北武士」など、「高槻」という勢力も確認できるため、入江氏と「高槻」との関係が問題となる。

【史料】(9)

奉寄進本役之事

合老段半者 宇コレヤス

四至 東限縄 南限類地
西限井溝 北限類地

撰州島上郡在津江村 牧方下地

右件本役者老段半分也、然而彼田地者信重先祖相伝之私領也、仍於黄牛山靈松禅院為嚴親密堂堅公禪定門追善、彼本役半分永代所奉寄進也、但毎年老貫文可有其御沙汰也、其外万雜公事不可有者也、於子々孫々更三不可有違乱妨、若於此旨在違背之子孫者可為不孝者也、仍為向後寄進狀如件、

寛正參年壬拾月廿五日

入江孫左衛門尉
信重(花押)

寛正三年(一四六三)、入江孫左衛門尉信重は親である密堂堅公禪定門の追善として、高槻近隣の曹洞宗寺院である靈松寺に「津江村」の「牧方」にあった「コレヤス」の田地一段半の本役半分にあたる錢一貫文を寄進し

た。この靈松寺には、享徳三年（一四五四）に真上与阿弥入道と正元（10）、文明十三年（一四八二）以前に「村人」（11）、永正五年（一五〇八）に芥河無為斎禅伯と彦太郎信方（12）、大永五年（一五二五）に芥川城を守っていた能勢源五郎国頼がそれぞれ寄進を行っている（13）。また、天文二十一年（一五五二）には芥川城主・三好長慶が禁制を発給し（14）、墓地には伝三好義興（長慶の子）の墓も所在する。武士層を中心とした地域の信仰を集める寺院であり（15）、入江氏もその一員であったといえるだろう。

また、天文十七年に入江左衛門尉成重が奈良二条院へ「天河堤」修築の遅延を詫びた（16）。天河堤とは、高槻の東約一・五kmの地点を南流する椋尾川の堤防のことと思われ、成重は名乗りの「左衛門尉」と「重」という名の通字から先の信重の後継者であり、入江氏が近隣の治水に大きな関わりを持っていったことがわかる。

さて、『寛政重修諸家譜』によれば（17）、もとの入江氏は駿河国入江郷に居住していたが、南北朝期に入江春倫が足利尊氏から高槻を賜ったとある。これに関して『高槻通史』は、このとき古代豪族の系譜を持つ近藤氏、もしくは高槻氏へ入婿したという伝承を載せる（18）。また、『大阪府全志』によれば（19）、入江駿河守が城下に所在する野見神社の祭礼日を享禄・天文

西暦	年号	表現	出典
1511	永正8	入江・高槻ヲ首トシテ	『瓦林政頼記』
		入江の一族等、近郷の一揆を催し	『陰徳太平記』
1527	大永7	兄備後守落行、高槻入江城工落ケル	『足利季世記』
		備後守は叶はで高槻入江城へ入けり	『細川両家記』
1532	天文元	(略)茨木・芥川・伊丹・高槻南北武士日日夜夜謹御坊	『本福寺草案』
1561	永禄4	入江所へ高槻へ信濃遣候	『私心記』
1568	永禄11	上郡高槻の入江方	『細川両家記』
		高槻城・入江城	『足利季世記』
		高槻之入江	『言継卿記』
1569	永禄12	高槻の入江方	『細川両家記』
		高槻城ニアリシ入江左近	『足利季世記』
		高槻城主入江左近	『足利季世記』
		摂州入江	『多聞院日記』

表1 古記録にみる入江氏の表現
（『高槻市史』史料編Iより）

期（一五二八〜一五五四）に定め、元禄二年（一六八九）の社記には「入江大神」と称したとある（20）。ちなみに、この野見神社の氏子圏は、現在の大字高槻の一部と芥川との間にあたる大字上田部である。他にも『高槻町全誌』によれば（21）、城下の禅宗寺院である理安寺は、足利尊氏が全国に建立した安国寺・利生塔の流れを汲み、その檀家が入江氏であったという。これら入江氏の性格をまとめると、地域の寺社や治水などとの関わりが強く、「高槻」という範囲の地域社会、もしくは武士層の中心に位置していたことがイメージされる。冒頭で取り上げた「入江」に「高槻」が付加される文献上の呼称は、この状態を表したものでないか。『陰徳太平記』（表1）では、入江氏が近郷の一揆を催したという。この記事などは、意外に入江氏の実態を伝えていると推察したい。

四 まとめ

最後に入江氏を中心に戦国期の高槻という場を考え、まとめに代えたい。まず、理安寺や野見神社など、入江氏にまつわる場の多くは、近世高槻城下町の北部に存在し、発掘調査でも中世屋敷地の溝が三ノ丸西北部と野見神社周辺で確認されている（22）。周辺には、文明十四年（一四八二）開創を伝える高月山円成寺（浄土真宗）（23）、延徳元年（一四八九）開創を伝える光明山久宝寺（浄土真宗）が所在し（24）、近世久宝寺の西隣には「御堂」本照寺（掛所。戦国期に富田へ移転伝承）があった。この城下北部は、山間部の集落から芥川宿を経由した道が取り付く位置にあたる。浄土真宗という地域住民の信仰に基づく寺院が戦国期に開かれたという由緒をふまえると、この道沿いに戦国期の集落が展開し、入江氏が関与したと想定される。近世の「馬町」という町名は交通との関わりが深い地区であることを示し、後には城下の町屋地区の中心「川之町」「新川之町」となった。

一方、城下南部には、茨木から富田を経由した道が到達している。文明五年（一四七三）開創の是三寺（浄土真宗）が所在し（25）、「高槻八幡」（八幡宮）は、寛永十五年（一六三八）の再興時に城下の武士に加えて近隣住民も奉加したことが確認されている（26）。周辺は高槻村文禄検地帳の集落「ほっかい」の比定地であり（27）、やはり道沿いには戦国期の集落が発達していたとみられる。ただし、寺社などに入江氏の関与は伝承されていない。

また、本丸などの城郭中心部では、近年の発掘調査で二ノ丸部分から中

世城館相当の堀が確認された(28)。「高槻通史」によれば、「天王弁天の御社辺まで森有之天王森」。「最近天台から掘出された卒塔婆二基はともに永禄四年とあって、この辺墓地」であったという(29)。入江氏段階の城館は二ノ丸付近に所在した可能性があり、本丸周辺には空閑地も想像される。以上の点を取りまとめると、戦国期の高槻は、周辺地域の村や町と淀川をつなぐ扇状地突端における交通の結節点であり、道に沿った集落が南北に存在していた。文献での「高槻南北武士」という表現は、イメージとして合致する。そして、入江氏が近世城下の中心となる北側の集落に対して強い関与を持ちつつ、二つの集落の中間(近世二ノ丸)に城館を構えていた(図2)。近世城下町の前提として、高槻がこのような性格を持つ場であったことを、ひとまず想定しておきたい。

なお、この小文は、二〇一二年一月二十二日に開催した一六一七会高槻例会での報告の一部を文章化したものである。貴重なご意見やご助言をいただいた諸兄に対し、感謝を申し上げたい。

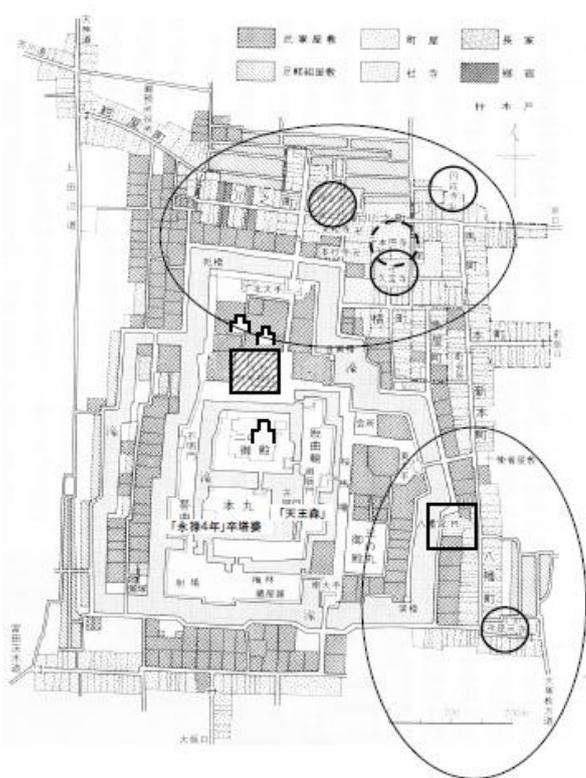


図2 戦国期の高槻のイメージ(楕円内が想定集落。
○は寺、□は神社。斜線に入江氏の関与)

【注】
(1) 中部よし子「城下町高槻の成立」(魚澄惣五郎編『大名領国と城下町』柳原書店、一九五七年)。

(2) 拙稿「畿内の都市と信長の城下町」(仁木宏・松尾信裕『信長の城下町』高志書院、二〇〇八年)。
(3) 森田克行『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』(高槻市教育委員会、一九八四年)。
(4) 小林健太郎「城下町高槻の形成」(『高槻市史』本編II、一九八四年)。
(5) 福島克彦「戦国畿豊期摂津富田集落と「寺内」- 歴史地理学的手法の再検討」(『寺内町研究』五、二〇〇〇年)。なお、上郡とは千里丘陵以東の島下・島上郡をいう。
(6) 今谷明「畿内近国における守護所の分立」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八、一九八五年。後に同『守護領国支配機構の研究』所収)、仁木宏「戦国・信長時代の茨木の町と茨木氏」(中村博司編『よみがえる茨木城』清文堂出版、二〇〇七年)。
(7) 十七世紀後半の状況を描いたとされる仏日寺蔵「高槻城絵図」に町場はない。
(8) 三浦圭一「鶴殿関所と芥川率分所」(『高槻市史』本編I、一九七七年)。
(9) 『霊松寺文書』「入江信重寄進状」寛正三年十月廿五日付(『高槻市史』史料編I)。
(10) 『同』「真上与阿弥入道等寄進状」享徳二十二年正月三十日付(『高槻市史』史料編I)。
(11) 『同』「霊松寺敷地契約状」文明十三年八月三日付(『高槻市史』史料編I)。
(12) 『同』「芥河信方等寄進状」永正五年五月廿七日付(『高槻市史』史料編I)。
(13) 『同』「能勢国頼寄進状」大永五年五月十二日付(『高槻市史』史料編I)。
(14) 『同』「三好長慶禁制案」天文二十一年六月十四日付(『高槻市史』史料編I)。
(15) 三浦圭一「在地武士の動向」(『高槻市史』本編I、一九七七年)。
(16) 三浦圭一「細川晴元政権下の高槻地方」(『高槻市史』本編I、一九七七年)。
(17) 卷第八百八十八「入江(藤原氏為憲流)」。
(18) 天坊幸彦「高槻通史」(高槻市役所、一九五三年)の63頁所収の「高槻系図」など。
(19) 「大字高槻」の「野見神社」の項(井上正雄『大阪府全志』、一九二二年)。
(20) 「撰津国島上郡高槻城内午頭天王御社記」(前出『高槻通史』75頁参照)。
(21) 「徳川幕府時代」の「松平氏と理安寺」の項(赤松吉雄『高槻町全誌』、一九三二年)。
(22) 鐘ヶ江一朗・宮崎康雄「高槻城三ノ丸跡」(『高槻市文化財年報』昭和63年・平成元年度、一九九一年)。

(23) 「大字高槻」の「圓成寺」の項(前出『大阪府全志』)。
(24) 「大字高槻」の「久寶寺」の項(前出『大阪府全志』)。元田家蔵「高槻城絵図」など。
(25) 「大字高槻」の「是三寺」の項(前出『大阪府全志』)。
(26) 井坂武男「高槻藩主岡部宣勝の家中奉加帳について」(『しろあどだより』二、二〇一一年)。
(27) 小林注4。
(28) 西村恵祥「高槻城跡確認調査」(『嶋上遺跡群』35、高槻市教育委員会、二〇一一年)。
(29) 『高槻通史』71頁の近藤家の記録に関する記述。

高槻藩九代藩主・永井直進の念持仏について

西本 幸嗣

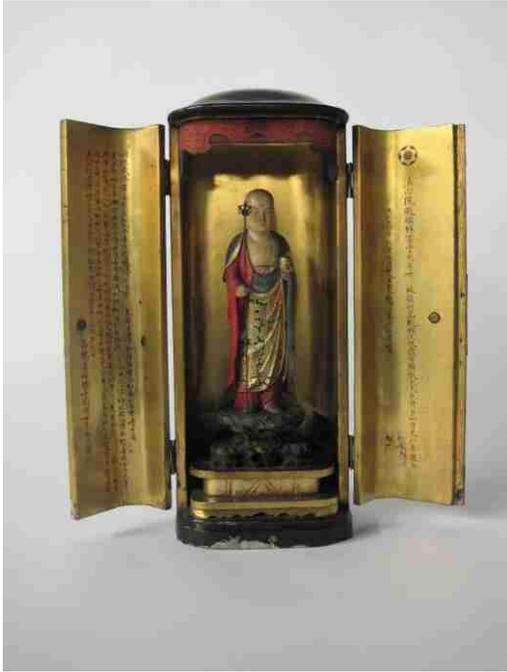
一 はじめに

当館特別展「神になった殿さま―永井神社の名宝と高槻藩―」開催に伴う文化財調査において、高槻藩主の念持仏と伝える厨子入りの地蔵菩薩立像を確認することができた。約三〇年前、京都市在住の個人から大阪府教育委員会へ寄贈されたものである。ここでは、仏像の概要と藩主・直進との関わりを紹介する。

二 木造彩色地蔵菩薩立像について

本像は、一木造で彩色を施し、一部に金箔押で文様をつける。光背・台座を具えるが、輪宝光の光背は破損しているためはずされている。右手に杖、左手に宝珠を持つ通形の地蔵菩薩で、蓮華座上に直立する。

髪を剃った僧形の頭部は面長で、袈裟を偏袒右肩につけ、条葉部には植物文を彩色する。背面は、文様や衣の表現がなく、朱色を彩色するのみである。保存状態は良好である。像高二〇・七cmの小型の仏像であるため、守り本尊として身近に安置する念持仏に相応しいものといえる。



木造彩色地蔵菩薩立像 附黒漆塗厨子木造



木造彩色地蔵菩薩立像

以下、法量などの概要を記す。

名称：木造彩色地蔵菩薩立像 附 黒漆塗厨子 一軀

形式：一木造 彩色 時代：江戸時代

法量：像高二〇・七cm 肘張六・七〇cm 胸奥二・八五cm 腹奥三・五二cm

裾張六・八七cm 面長四・二二cm 面幅二・五六cm 耳張二・九四cm

面奥三・〇三cm 足先開(外)三・六七cm 足先開(内)一・七二cm

三 藩主直進と地蔵菩薩立像について

高槻藩永井家の九代藩主・直進は、宝暦十一年(一七六一)に生まれ、明和八年(一七七二)の十歳の時、八代藩主直珍の跡を受けて九代藩主となった。藩祖直清と同じ「日向守」を受領する。藩校・菁莪堂の設立に尽力する一方、藩祖を祀る永井神社の造営などを行った。

この地蔵菩薩立像は厨子に安置されている。厨子(高三九・三cm)は観音開き式。全体を黒漆塗にし、内部は金箔押。扉内側の墨書によって藩主直進と本像の関わりを知ることができる。



由来を伝える厨子扉 ※左上撰文

【右】

(家紋) 法心院殿瑞林宗雲大居士 故摂州高槻城主従五位下朝散大夫永井日向守大江直進公
文化十二年乙亥正月廿八日薨赴 官以二月二日

【左】

此地蔵仏者、妾所自製也、妾少遇灑掃之日所 先君手沢如雞肋者而秘奉私匣有年于茲
先君即世臣妾慟哭居喪之際与侍妾俱灑淚所糝糊曝乾也、令喪之日令仏匠脩飾之欲以伝不朽
妾固女子之事
終身秘蔵竟以何為妾扱親戚中可供時祭者欲令不絶賤氏賞妾有功于 先君也新 命高橋尊
賜十口世二子孫奉仕槻城乃以実弟長兵衛長女妻平野社家中西讀岐守次男豊次郎養為嗣子使
襲橋而宗賤氏
冀以此像安措 室永為氏宗耳聊叙其由刻之龕申以貽子孫云
高槻灑掃賤妾園浦女高橋氏謹誌

左扉には、永井鉄線文を付し、直進の法名「法心院瑞林宗雲大居士」が記されている。文化十二年(二八一五)正月二十八日に薨赴(死去)とし、公に官(地位)を辞した日として二月二日とする。これによって直進は、五十五歳で没したことがわかる。なお、永井家の菩提寺・悲田院に伝わる「永井直進像」の賛では、「二月二日葬」とあり、薨去して四日後に葬送が行われた。また、この没年表記から、墨書は後世に記されたことになる。

右扉には、本像の由来が記されている。それによると、まず、直進のお

側に仕えた「妾所」の自製の仏像とある。ただ、作風が通形で、背面を簡素化し、光背や台座などは江戸時代の既製物で多くみられるものといえる。また、直進が生前身近において信仰していたことを伝える。直進が薨去したことで、妾は嘆き、悲しんでいた状況を記す。その後、妾所で、仏師による修理・彩色が施され、秘蔵されてきたという。本像の鮮やか彩色はそのときのものと考えられる。

そして、代々妾所で受け継がれたのち、ゆかりの家臣・高橋氏に下賜されたことがわかる。高橋氏は不詳である。

四 おわりに

地藏菩薩は、「勝軍地藏」などと称して武士・大名らに好まれる尊像のひとつであり、念持仏になりやすい。今回、藩主ゆかりの念持仏をはじめ確認することができた。高槻藩主自身の所用品は稀少であるとともに、さまざまな功蹟を残した九代藩主・直進の信仰の一端を知る貴重な資料といえる。

発行日 二〇一二年三月一七日

編集・発行 高槻市立しろあど歴史館(大阪府高槻市城内町一番七号・

TEL〇七二(六七三)三九八七)